

ーさんが水文学の実務家を育成する研修に参加したように、日本での限られた時間の学びを実り多いものにしてもらうため、PEACE留学生にも参加を促している。

### 指導教員と二人三脚 母国の課題解決を目指して

ファズラーさんは、都市化で人口増加が進む首都カブールを対象として、気候変動の影響と水資源の適切な管理をテーマに修士論文の準備を進めている。指導を担当する琉球大学の堤純一郎教授は、「気候変動に関する多くの研究は長期的な変動を扱っていますが、彼の研究は、人々の生活に直に影響を与える短期的な気象変化に着目しているのが特徴です」とファズラーさんの研究の意義を説明する。

琉球大学はこれまで国際交流につながる事業に積極的に取り組み、大学の国際化を進めてきた。PEACE留学生の受け入れは、今年4月時点で34人になる。

堤教授は、「私個人としても、アフガニスタンの留学生を受け入れる中でイスラム教信仰の多様性に驚かされました。私の研究室では屋上で実験を行

うことが多いのですが、階段の踊り場でお祈りをする留学生もいます」と留学生との日々を語る。

水資源管理に必要なデータの収集方法や分析の仕方など、堤教授の指導を受けながら着実に知識の幅を広げているファズラーさん。

昨年12月には、京都で開催された国際会議で研究発表も経験した。

水・エネルギー省の行政官向けの研修で指導する株式会社建設技研インターナショナル水資源部の後藤俊宏専門家は、「以前は、アフガニスタンの技術者と話をすればならないことが少なくありませんでした。でも、研修に加え、



水・エネルギー省の研修に参加したPEACEの留学生ら。夏期休暇を利用して、茨城大学や名古屋大学など、それぞれの留学先から研修に参加した



JICAは稲作プロジェクトの実施にあたり、アフガニスタン地方部の治安が安定するまでは、農業灌漑牧畜省の地方職員を隣国に招いて研修を行っている。イランで日本人専門家のアシスタントを務めるハニフさん(左)

PEACEの卒業生を輩出し始めたことで、今では両国の技術者が同じ専門知識という「共通言語」で議論することができるようになりました」と、人材育成の成果を喜ぶ。

### 帰国生の活躍 より良い未来の実現に貢献

一方、2014年3月に宮崎大学大学院の農学研究科を修了したモハマド・ハニフ・アフザリさんは、現在、母国で農業灌漑牧畜省灌漑研究局の研究科長として活躍する。



日本で学んだ知識を生かし、母国で灌漑設備を点検するハニフさん。留学中は、博士課程の講義も受講するなど、意欲的に学んだ



PEACEの研修発表で位田教授(中央)とチューターと共に広島を訪れたハニフさん。位田教授は、「PEACEの留学生には、全学部生対象の授業で自国紹介してもらったのですが、大好評でした」と日本人学生への効果を話す。

農業はアフガニスタンの基幹産業の一つだが、農家が栽培に関する知識にアクセスする機会が限られていることや水不足が課題となっている。中でも、灌漑設備の整備は急務だ。

「多くの農家は、給水の適切な量やタイミングなどを知らず、今も伝統的な方法に頼っています。国の農業の生産性向上に貢献するため、アフガニスタンで需要の高いトマトの灌漑法と安定生産をテーマに日本で研究しました」

ハニフさんが留学していた宮崎大学大学院は、「世界を視野に地域から始めよう」のスローガンの下、グローバル人材育成を目指している。

今年3月に定年を迎えた位田晴久教授は、同学でハニフさんの研

究を指導してきた。「農学教育・研究では、現場を観察した上で最善のアプローチを考えることが基本ですが、アフガニスタンではそれがありません。治安が安定したら現地に足を運び、彼らと手を携えてアフガニスタンの農業の発展に貢献できればと思います」

そう話す位田教授の指導の下、ハニフさんは在学中に、従来のほぼ半分の水量で十分な収量と品質を得ることができ、かつ簡易な改良型養液栽培システムを開発。現在、研究成果を所属先にも共有し、自国での展開を目指している。

日本での思い出を聞かれると、ハニフさんは、「素晴らしい先生に出会えたことです。先生は、私にとって父親のような存在になりました。美しい自然、親切な人々、

宮崎大学で過ごした時間や案内してもらった日本各地は全て忘れられない思い出です」と目を細めた。

同じく農業灌漑牧畜省の職員で、早稲田大学大学院で修士号を取得したPEACE帰国生のアフドゥル・ハシブ・ハビブさんは、現在、国際機関が支援する「ファーマーズ・コールセンター」の立ち上げに携わっている。同センターは将来的に、農業関連の情報を一括管理するデータベースを構築し、農家をはじめとする外部からの照会に回答するなどの役割を担う。情報通信技術の活用が進むことで、地元の農家はもちろん、農業を研究する世界中の人々がアフガニスタンの農業情報にアクセスできる未来が近づいている。

アフガニスタンのファリダ・モ



アフガニスタンでPEACEを総括するファリダ・モマンド高等教育大臣

マンド高等教育大臣は、「私たちの国では、長年の紛争のため、開発プロジェクトを牽引する優秀な政府人材が不足しています。人材育成は全セクター共通の優先課題です」と復興における「人づくり」の重要性を強調し、「日本によるPEACEを通じた協力で心から感謝し、この友好関係を一層深めていきたいと思っています」と感謝の気持ちを言葉にする。

異国の地で修士号取得を目指す2年間は、私たちが想像する以上に大変な日々だったに違いない。それを乗り越え、母国で頼もしく活躍するハニフさんに聞いてみた。PEACEの留学で得たものは何ですか――。

「私の夢は、善良で世のため、にくせる人間になることです。知識の国、日本で学業を成し遂げた今、私は人の役に立っている人間になれました。これは、PEACE無くして実現し得なかったことです。夢をかなえてくれて、ありがとう。友人として、皆さんの親切を忘れず、いつか恩返しできたらと思っています」

日本各地の大学院で、祖国のため研究に励む留学生たちへ。日本にアフガニスタンとの出会いをくれて、ありがとう。私たちは、アフガニスタンの平和で豊かな未来を願ってやまない。

(編集部 湯澤絵里子)

今年4月、位田教授がアフガニスタンに送った園芸学や植物生理学、土壌肥科学などに関するジャーナルの到着を喜ぶハニフさんと農業灌漑牧畜省の職員たち

